発行所（郵便番号100）
東京都千代田区丸の内2−4−1
丸ノ内ビルヂング781号室
社団法人スウェーデン社会研究所
Tel（212）4007・1447
編集責任者　中嶋　博
印刷所　関東図書株式会社
定価200円（年間購読料参千円）
1984年4月25日発行
第16巻　第4号
（毎月1回25日発行）
昭和44年12月23日第3種郵便物認可

スウェーデン社会研究月報

Bulletin Vol. 16　No. 4

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning
(The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)
Marunouchi-Bldg., No. 781. Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan

米国、スウェーデン、日本

U. S., Sweden and Japan

常務理事　早稲田大学教授　中嶋　博
Prof. Hiroshi Nakajima

ヒューストンで開催の第28回比較・国際教育学会大会に招かれ、当地にやって来て丁度2週間になる。

ベバリー・ヒルズの豪邸に象徴される資本主義大国の米国、首相もアパートに住む福祉国家スウェーデン、〝うさぎ小屋〟に庶民の住んでいる経済大国日本、それぞれを比較して考えさせられることが余りにも多い。

今日、米国は民主党大統領候補者選出予備選挙をめぐって、〝はげしいマラソン・レース〟（"Time" Mar. 26. 1984）を演じている。年収2万5千ドルを境いに低いものがハートを、またやゝ高齢層にあるものがモンデールを（NBC調査）支持しているのが興味深い。

スウェーデンの首相に誰が選ばれようが対日政策に変りはないが、米国では、大方の人が〝どうせレーガンさ〟とはいっているものの、近時の民主党の人気はあなどり難く、対日政策で保護主義への転換もありうるし、来るべき大統領選の結果に注目したい。と同時に日本はエゴイズムをつつしむべき時と考える。

さきに高齢者といったが、スウェーデンに見られる老夫婦がいたわり合って路上を歩いている姿が米国では少ない。しかし子供と親がスープのさめない住居関係にあることは共通である。

また米国では、母親の6割が働いているというのに、乳幼児を預る保育所が非常に少なく、いわゆる無認可の家庭保育がブームになっており、スウェーデンと対照的である。

学校といえば、とにかく一人びとりが生かされているのが印象的であるが、「国家の危機——教育改革への至上命令」（1983年）以降、日本を意識しての教育改革を望む声が強いが、一部でそれは狭いナショナリズムにつながり危険であると指摘されており、これまたスウェーデンが国際化を大きな柱としているのと対照的である。

しかし米国とスウェーデンで共通なことは、成人教育が盛んで、決して学校教育に限ることなく、たしかに資格・実力がものをいうが、断じて学歴社会でないことに注目する必要がある。

つい先日、米国上院は、公立学校での宗教教育提案を否決した。しかし米国でもスウェーデンでも、家庭におけるそれを何等否定していないことを見落してはならない。

今日の新聞によると、ティーン・エイジャーの意識調査で、規則的に教会に出席し、あるいは宗教的サービスに参加する者が、1974年に29%であったのが、1983年に64%にも増えている（"USA・TODAY" Mar. 28. 1984）ことにあえて言及しておきたい。　—ロサンゼルスにて—

目　次

米国、スウェーデン、日本……中嶋　博…1
スウェーデンの学習サークルの源…阿部　貞子…2
1983年度ノーベル賞諸行事出席記(2)
……田中　育郎…4
（研究会ニュース）……6
蕨岡泰氏を囲む会
菱木先生を囲む会

＜寄　稿＞

スウェーデンの学習サークルの源

Source of Swedish Study Circles

——民衆運動によを貢献——

Contribution by the Popular Movements

阿　部　貞　子

Miss Teiko Abe

スウェーデンの成人教育において、学習サークルには、1980／81年現在、サークル数311,536、参加者総数2,846,150人と、1979／80年を頂点に一応急増が止んだものの、全人口6,052,200人（16～74歳、1981年度）に比し、依然多数の参加があった。このような学習サークルの源は民衆運動に尋ねることができる。特に、信仰復活・自由教会運動、禁酒運動、労働運動の所謂三大民衆運動に着目したい。これらの運動が起こった19世紀後半から20世紀前半は、学習サークルが芽ばえた時期でもあった。

民衆運動

信仰復活運動は、後に国教会と結びついた活動と非国教会（自由教会）活動に分かれた。宗教的政治的に、イギリスとドイツに触発されたスウェーデンでは、民衆をより日常的な意味で神に近づけるという思想が、自由教会派による、支配的な国教会への抗議となって表われた。1850年初頭、スウェーデン国教会から分かれた動きがオルサ地方に起こり、1880年代には国教廃止化及び政治的な活動が始まった。国教会は、当時の学校制度を統轄していた故に、自由教会会員は小グループを編成して、独自に学習と討論を行なった。当時の自由教会巡回伝道者達もこのような形で養成されたといわれる。

禁酒運動は、部分的禁酒運動は既に1830年代に始まり、絶対禁酒運動は1870年代に全盛を迎えた。19世紀後半の人口の増加は、農村部から都市部への人口流出とアメリカへの大移住を促した。工業と貿易における就業人口が増え、近代階級社会に加えて労使間の分裂があった。急激な近代化に伴う厳しい生活状況の下で、アルコールに逃避する人々は少なくなく、次第に社会改革へ向けての人々の認識が広まっていった。禁酒運動が教育団体活動の研究に従事した背景でもある。

生産者と消費者の協力体制はイギリスから伝達された。労働者達は、食物や生活必需品の大規模な委託販売を獲得する為の組織を作った。しかし、こうした活動に熱心な人々は、初等知識がある程度だったので、会計学等における知識の不足が、活動にとっては明らかにハンディであった。

労働運動は徐々に形を帯びて、1889年の社民党（ＳＡＰ）と1898年の労働総同盟（ＬＯ）の設立となる。困難な環境にあって、労働者達は労働運動に必要な学習に励んだ。その方法はグループ内で読書し、討論するもので、学習サークルの形であった。特に会計学、社会主義等の内容が採用されたが、国や国教会の図書館から適当な文献は得られず、労働者らによる図書館が作られたりした。

このように、それぞれの民衆運動では人々の学習が重要視された。当時の教育体制からは運動目的に適う教育が得られなかったこともある。スウエーデンでは1842年に初等教育が義務制度化されたものの、直ちに全員がこれを授かる財源は乏しく、青年に対する教育も都市部に限られたのだった。民衆運動の中で最初に学習活動を起こしたのは禁酒運動であり、次に労働運動、1940年代までに自由教会運動、農民運動、サラリーマン運動による学習サークルの勃興と続く。

学習サークルの土台

1896年独立禁酒団（ＩＯＧＴ）が組織した教育の方法は、専制主義的な教師が大集団に講義を行なうというものだったが、これに反対してオスカル・オルソンは、学習は、方法として色々な教材を使い乍ら参加者の話し合いを以て少数グループの中で編まれるべきであると提唱した。彼は禁酒団学習組織の初代学習監督官となり、学習サーク

の父と呼ばれた。彼によれば、専任の所謂教師は必要ではない。代わりにサークルリーダーが参加者間の討論を鼓舞し、リードし得る。リーダーシップはサークル会員間で度々交替された。学習サークルの基本は、当初から少人数制と参加者の経験のバランスに基づき、学習教材やリーダーは多少知識・経験に勝るものの、知識の根源ではなかった。教材は読み物が主で、事前に会合の準備として読まれる。学習の展開は参加者とリーダーに任せられた。やがて学習内容は技術協力、文章要約の訓練、個人の能力開発に及び、労働運動内では会員の養成にこの学習形態が普及、学習サークルの形で職業訓練の機会も与えられた。学習サークルでは、少人数の共同学習を通じて学習者間の仲間意識が高まること、リーダーは学習者と個人的な接触をもつと同時にサークルに成果を招く責任をもつこと、教材は学習者の経験に従って適切に選択されることが望まれた。この三者における親密な関係と学習形成の共同のプロセスが、学習サークルに、成人対象の教育手段としての柔軟性という特性をもたらした。

成人教育としての学習サークル

民衆運動による政治活動はメンバーを国会、地方議会へと当選させた。1911年国会第二院議員の約$\frac{1}{4}$が自由教会会員で、1911年と1917年には約$\frac{2}{3}$が禁酒運動出身の絶対禁酒者で構成された。民衆運動の政治活動に特徴的だった対話が殊に強調されたのは、1909年及びロシア革命の余波を受けて1917年から1918年に革命の兆しがみえた時だった。民衆運動の会員の多くは革命を支持したが、平和的話し合いという訓練の素地は、彼らに非暴力的解決の道を踏ませた。1902年、禁酒運動においてオルソンの新しいタイプの学習サークルがルンドで形成された。1912年、議会は少なくとも２万人の参加者数と図書購入費６千Skrの支出に該当する教育団体への助成を決議し、労働運動の学習サークルがまず対象となった。1912年、労働者教育協会(ＡＢＦ)が設立され、他の民衆運動がこれに習った。1936年様々な教育団体の中央の協力組織として、共同教育協会が設立し、活動の一つは雑誌「民衆文化」に象徴された。大戦中、教育協会は戦争反対勢力支援に貢献、1940年代後半までに13の認可教育団体ができていた。1950年代には成人に対する学習サークルの方法と学習の可能性に関する重大な論議が起こった。学習サークルの参加者は初め青年層に片寄ったけれども、急速な社会変化と「正規の学校制度の爆発的ともいえる成長」（マークルンド）に対して、新しい時代に適応する中高年世代の為の学習機会が求められたのである。教育庁とストックホルム大学クルシュベルクサムヘーテンの協力で、1953年成人教育セミナーが開催された。トルシュテン・フーセン教授、各教育団体の学長、教育主任らによって先導されたセミナーの努力は、学習サークルリーダーの教育に影響し、教育団体の質を高めた。それは成人の、学習困難という神話を破るものでもあった。1958年に編集された「成人教育」は学習サークルの方法の問題と、中高年世代の学習の可能性に関する見解を要約して、教育協会の活動に規範を与えるものとなった。補助金は1960年代と70年代にかなり上昇し、1967年、サークルリーダー、教材、行政に対して国の助成をするという記念すべき決定を迎えた。1970年代は身障者・移民及び正規の教育機会に恵まれない人々のコースを保護する為に、また1974年には文化と芸術活動促進に対してそれぞれ助成がなされた。

おわりに

学習サークルは現在最も大衆的な学習形態であるけれども、以前は、一つは社会改革と階級闘争の為の手段としての教育であり、一つには社会変化に対処する一般民衆の教育水準向上を目ざす教育であった。社会の民主化の過程は学習サークルの発達のそれと照応するだろう。

筆者は一昨年、昨年に学習サークルを体験し、その理想的ともいえそうな指導性と学習の展開に深い衝撃を受けた。リーダー達の、少なくとも教授するという意識は皆無らしく、会員もリーダーを仲間と見てしまう。学習は皆の欲するところとなり、豊かだった。リーダー達の受けた教育に何度思いを巡らせたことだろう。学習サークルが所謂学級化する傾向が認められ、教育団体も数年前から学校の授業に陥るのを懸念している。それでも関係者らが、学習サークルを成人教育の方法として珠玉のように思うのも無理がないのだろう。学習サークルでのあの不思議な感動はどうしても忘れることができない。

1983年度ノーベル賞諸行事出席記(第2部)

Attendance at the Nobel Festivities in 1983 (Part 2)

熊本大学医学部教授（生理学）　田　中　育　郎
Prof. Ikuro Tanaka

グスタブ3世

グスタブ1世バーサによる独立後、グスタブ2世アドロフによって1等国にのし上がったスウェーデンは、バルト海に君臨していましたが、ヨーロッパ大陸を席捲して日の出の勢いにあったカルル12世が、ペテロ大帝にポルタバで敗れてから、国運が下り坂に加速されつつあった時に即位したグスタブ3世は、政治に精励して、ペテロ大帝に次ぐ英主といわれたロシア女帝エカテリナ2世の圧力その他を跳ね返したりして、1772年のロシア・プロシア・オーストリアによるポーランド分割のような亡国を免れました。

風流人のこの国王は、演劇・音楽・芸術・文学を愛好し、文化先進国のフランスにかぶれて、1773年オペラのステージを造り、みずからオペラ脚本をフランス語で著作し、ストックホルム郊外のドロットニングホルムに小ベルサイユを造営したりしましたが（ドロットニングホルム劇場は、1700年代のものとしては、現在世界で唯一の実働中の劇場だそうです）、1786年にアカデミーを創設しました。このアカデミーこそが、ノーベル文学賞を決定する機関で、川端康成氏の受賞者講演会も、Golding 氏のものと同様に、このアカデミーで実施された模様です。

アカデミーの東側の王宮坂を下る途中左手側に衛兵の立っている王宮があり、下りきると対岸に国立博物館が見える海岸に出ます。この岸辺に立つ銅像がグスタブ3世（50クロノール紙幣にもその像が印刷されています）で、王宮内のグスタブ3世博物館に、資料が展示してありますが、グスタブ3世は、自分が建てたオペラ劇場での自分が主催した仮装舞踏会の席で、1792年に暗殺されましたけれども、この治世の21年間が、スウェーデンの芸術的雰囲気が最高潮に達した時代で、グスタブ風 Gustavinska の時代と呼ばれています。Linné の弟子であり後継者ともなった Thunberg が日本に来た直後の時代です（注1）。なお蛇足ですが、日本人大黒屋光太夫がエカテリナ2世に謁見した時期ででもあります。

授与式

12月10日の授与式場のコンサートホールは、警備が緩められていた点が、前回と違っていました。警官は入口にわずか数人、若い男がビラを配っているのを別に制止もしていませんでした（私も1枚をもらいましたが、スウェーデン共産党の平和賞に対するキャンペーンのようでした）。

オーバコートを預ける際に、日本人のご夫婦に会いましたが、駐ストックホルム越智大使ご夫妻でした（注2）。元駐瑞大使で当研究所の高橋通敏顧問から、越智大使への紹介状を頂戴していましたのに、大使館を訪ねる機会がなかったので、この場所でご挨拶申し上げました。

もしも受賞者の国の大使であるならば、前回の福井教授受賞の際の大和田大使ご夫妻の如く、昨夜のレセプションや、本日の行事に主役の席に着かれるところでしょうが、今年は日本人の受賞者のいない悲しさ、シティーホールでの祝宴の招待もなかった模様です。米国の駐瑞大使はこの点非常に恵まれて、毎年の受賞者で、毎年が主役ということになりましょう。

1階席の前半分ぐらいが、最上流階級のお偉方やその家族、外交関係の人が多いという説明でしたから、越智大使ご夫妻がどのあたりだろうかと、夫人の和服姿を目標に捜しましたが、前回の福井教授夫人が真正面2列目に直ぐに見つかったのとは対照的に、結局わからずしまいでした。ダークスーツ姿の日本人男性も幾人かが階上席で、盛んにカメラのシャッターを押しているお国振りが目立っていましたが、出席者の約60%が外国人ということでした。

ノーベル生誕150年という特別の年であることは、最初に述べましたが、150年という数字が至る所に掲示してあり、Bergström 財団理事長の冒頭の開会挨拶（出席者へ配布された英文に翻訳された説明書によると）にも、150年が強調されていました。

舞台上のノーベル財団幹部席には、左側最前列の右端の Granit 教授（1967年度受賞者）は前回と同様でしたが、2番目 Ulf von Euler 教授（注3、注4）に代わり Siegbahn 教授（1981年度受賞者）、3番目 Samuelsson教授（1982年度受賞者）となっていまして、第1部(注5)で述べた Pernow 教授や Ottoson 教授のお顔も、カロリンスカ関係者席の中に見られました。

定刻16時半にストックホルム交響管絃楽団演奏の王室歌で全員起立の中に、カルル16世グスタブ国王とシルビア妃の両陛下、ご両親代理のベルティル公ご夫妻の両殿下の4人が、向って右側の王座にご着後、再び全員起立拍手の中に、受賞者達が、東洋人顔貌の印度出身の米国人 Chandrasekhar 教授(物理学)を先頭に Fowler(物理学)、Taube（化学)、McClintock（生理学または医学)、Golding（文学）、Debreu（経済学）の順で入場、向って左側の受賞者席に着きました。

各賞の授与理由の説明者は、Johansson（物理学)、Lindqvist（化学)、Ringertz（生理学または医学)、Gyllensten（文学)、Mäler（経済学)の各教授でした。楽団の指揮者は、James Loughran、独唱ソプラノ歌手は Sylvia Lindenstrand と書いてあり、演奏音楽の解説に、当コンサートホールのEngström 館長の執筆になる英文パンフレットが渡されました。

最後に全員で国歌が斉唱されましたが、この解説パンフレットによれば、国歌として法的根拠はないそうで、日本の「君が代」と同じ性格のようです。「君が代」や「日の丸」を否定する人種が、このような法律にない自然発生的な事実に何といってイチャモンをつけるか興味のある所です。

祝　宴

コンサートホールから専用バスで祝宴会場のシティーホールへ移りました。配布された座席表で自席を捜して「青の間」の指定された席に待機して開会に備えました。総員1,310名の招待客ですが、中央のメーンテーブルは空席です。予定時刻の18時45分にアナウンスがあって、音楽と共に全員起立の中に、階上からのパレードを出迎えました。

先頭は国王陛下と MaClintock 教授でしたが、2年前の着物姿の福井教授夫人がパートナーとして国王陛下と腕を組んで先頭を行進なさった光景を思い出したりしました。2番目はシルビア王妃と Bergström 理事長で、クリスチナ王女は Golding 氏がパートナーでした。

中央のメーンテーブルに着席後、一般の人達全員も着席しましたが、その直後再びアナウンスで、全員がシャンパンを満たした杯を手にして起立、国王陛下の乾杯の音頭ののちに、卓上のメニューに従ったフルコースのご馳走が次々に運ばれて来ました。私の席の近くには、1983年4月の大阪での日本医学会総会に招かれて特別講演を実施後に熊本大学医学部その他で特別講義をなさった Curt von Euler 教授（神経生理学）とその夫人、日本の生理学者との交友も広い中国系のニューヨーク州立大学生理学の Frederick F. Kao（高逢田）教授とその夫人、スウェーデン王立科学アカデミー外国人課長の Tandberg 博士とその夫人などが配されていました。

各賞受賞者のスピーチや Palme 首相の挨拶が合い間に行なわれましたが、中世の形式さながらの平和の象徴みたいなこの会で、日本の「軍艦マーチ」が相当長時間演奏されました。日本の平和主義者やマスコミならば、軍国主義でけしからぬと決めつけるところでしょうが、こんな短絡的議論は、空虚で不毛のような気がした次第でした。

二次会

いよいよ閉会となって、入場時と同じ順序でメーンテーブルのカップルが階上へ去って行きました。次いで一般の人達の退場で、私のパートナーは Tandberg 博士の夫人で、病院リハビリ訓練士の職にあると自己紹介をしてくださって、舞踏会場の「黄金の間」で踊ろうと誘われましたが、辞退しました。それでは王様と受賞者達との座談会の場所へ連れて行くからということで、彼女に随行しましたけれども、すでに終っていましたから、代わりに各所を案内して頂きました。

「青の間」は宴会場が片付けられて、ビューフェや屋台の飲み屋に変わっていました。今回の全受賞者の金メダルと賞状の展示してあるコーナーでは、生理学医学賞に限り、賞状に絵模様がなく、文字のみというのが慣例となっているとの説明を受けました。この賞の日本人第1号の栄光を、誰方が射止められるのであろうかと、いろいろと思いをめぐらしたことでした。

注1　月報　8巻1号2頁（1976・1・25）
注2　月報　15巻10号6頁（1983・10・25）
注3　月報　7巻4号9頁（1975・4・25）
注4　月報　14巻2号5頁（1982・2・25）
注5　月報　16巻2号2頁（1984・2・25）

蕨岡　泰氏を囲む会

約12年間スウェーデンに在住し、この間ストックホルム大学で修学され、このほど帰国された蕨岡　泰氏を囲み、滞瑞中の所感、見聞を聞く会を去る２月29日当研究所で催した。

同氏は、冒頭に元駐日大使のグンナー・ヘックシャー氏著「アジアの勢力抗争」の内容について説明され、この著書の結びとも云えるアジアはアジア人によってその方向はきめられるべきであろうと云う言葉に尽されている如く、洋の東西を問わず、夫々の国の人々の考え方は、その歴史や立地事情などにより異ることを踏まえて理解すべきであることを述べられたが、これに引きつづきスウェーデンの教育や一般福祉の近況についてもふれられ極めて有益な講話であった。

菱木先生を囲む会

去る３月12日、当研究所において、専修大学法学部教授菱木昭八朗先生より、スウェーデン法研究25年を顧みてと題したご講話を拝聴した。

同教授からは、過去再々にわたり、身分法のみならず多方面の法制の解説を当研究所月報へお寄せいただき感謝に堪えぬところであります。

今回のご講話では、スウェーデンに限らず一国を知るためには、当然ながらまず正しい情報の把握が必要であることを強調され、特に身分法分野においては、その国のモラルに関する考えを正確に理解した上で検討することが必要であると述べられた。

また、スウェーデンについては、国民意識の急変貌が注目を要するとして、若者へのおもねり、社会道徳の低下等の問題につき実情把握の必要性を指摘され、参加者に強い感銘を与えられた。

＜ＳＩＰニュース＞

政府委員会、エネルギー技術とノウハウの輸出増大計画を提案

此程、スウェーデンの政府委員会はエネルギー技術分野の製品とノウハウの輸出促進のための特別プログラムを提案、それに関する報告書をまとめ、エネルギー相に提出した。

同報告書は、エネルギー技術分野に属する５部門を特にリストアップしている―地域暖房、エネルギーの供給と保存のための設備、小規模な給湯、湯生産のための新技術、大型ヒートポンプ―が、これらはいずれもスウェーデン工業が非凡な能力を有し、かつ、輸出見通しが明るいと認められたものばかりである。

炎道ガスのクリーニング技術を含む発掘燃料の燃焼もまた、同分野において力強い成長を遂げつつある一部門であり、現在スウェーデンでは、良好な作動状態にある数基の設備が操業中である。

同報告書によれば、電力生産及び電気エネルギー技術の分野では、スウェーデンは高い能力を有しているという。新設備以外にも、とりわけ発展途上国には、既存のプラントやシステムの効率を向上させるような手段に対する大きな市場が存在し、この種の手段には、これまで世界銀行が最優先に便宜を計ってきている。

その他の重要な部門としては、パルプ及び製紙工業の省エネプロセス、エネルギー効率の良い建物、熱再生、気候コントロール等があげられよう。特に最初の項目は、スウェーデンにおけるかなりの省エネ達成に貢献したといわれる。この方面の能力の卓抜性で、スウェーデン工業は国際的な優位―とりわけ、一世帯向け住宅に関して―を保っている。同様に、暖房及び換気装置も諸外国で高い需要がある。

また、同委員会が特に重要だと考えている市場は、ヨーロッパ、北米、東南アジアである。1984～87年にかけてのプログラムの総コストは3,300万クローナ（邦価 約10億2,300万円）と見込まれ、その資金の３分の２は、政府により、残りの３分の１は工業界から捻出されることとなろう。

第三種郵便物認可　昭和44年12月23日　スウェーデン社会研究月報　昭和59年4月25日発行　第16巻第4号　毎月1回25日発行　編集責任者　中博　発行所　社団法人スウェーデン社会研究所　定価　二〇〇円